

子育てと性別役割分担について－中国の実情

大浜 慶子（中国）

中国の改革開放と同時に一人っ子政策が実施されて 30 年が経ち、一人っ子世代が親になる時代となりました。都市部住民のライフスタイルや子育て観は大きく変化し、私の住んでいる北京市の統計によると、出産適齢期の女性の平均出産年齢は 2005 年の時点で 28.83 歳、2000 年よりも 1.5 歳高くなり、同調査によれば出生率はなんと 0.68、日本以上に晩婚化と少子化が急速に進んでいます。

中国では五十年代以降、社会主義制度の下で女性の社会参加が奨励され、共働きの家族モデルが形成されてきました。女性が結婚、出産しても仕事を中断せず、定年まで働き続けられるよう、男女の「同工同酬」（性別の区別なく同じ労働に対して同一賃金を保障する制度）や「五期」（月経・妊娠・出産・哺乳・更年期）の特別労働保護、託児所、幼稚園を福利政策の一貫として充実させるなど行政面から女性の労働がサポートされてきました。その結果 90 年代まで、子育て期にあたる 20～40 代の女性の労働力率は 90% を維持し、男性のそれとほぼ拮抗し、中国は世界でも群を抜いて女性の就業率が高く、アジア諸国の中で男女の家事分担が進んだ国として知られています。

しかし、子育てに焦点をあてるとどうでしょうか。

現行の中国の労働法では働く女性に 90 日の産休が認められています。一人っ子政策推進のため、「晩婚晩育」（初婚年齢男性満 25 歳、女性満 23 歳以上、妻の第一子出産年齢 24 歳以上）を実施した場合、さらに 30 日が加算されます。これは夫婦どちらが取得してもよいことになっていますが、実際には男性が育休を取ることは稀で、妻の分娩前後にせいぜい一週間付き添う程度。積極的に家事に参加するイメージとは裏腹に、子育てに関しては、中国の男性は意外に保守的です。

公的機関や学校、社会主義の伝統が残る職場で働く女性には通常半年間の産休が許されています。一年の哺乳期間も確保されており、お母さんたちは子供の出迎えなどを理由に夕方 4 時頃になると一斉に早退します。子育てをする女性にやさしい環境のようにみえますが、採算のとれない女性職員の採用を制限する機関が激増しており、女性の締め出しが行われ、社会問題化しています。

一方、市場合理化が加速し、競争の厳しい企業で働く女性にとっては 90 日間の産休も絵に描いた餅でしかありません。多くの場合、夫婦どちらかの母親が泊まり込みで子どもの世話をしています。中国の女性の子育てと仕事の両立の圧力は重く、専業主婦を選ぶ女性も出てきましたが、経済力のある女性は家政婦を雇い、母親と 3 人がかりで保育を分担し早期復職をめざします。

前世紀より、中国の育児制度は女性中心に確立されてきたことが指摘されています。さらに 80 年代以降の急速な市場化、一人っ子政策の受容、都市と農村の格差などの要素が複雑に絡みあって、子育ては益々女性の役割として固定化され、性別や女性間の階層化を

広げています。

この事態を重く捉え、改善を求める第一声を発したのが中央党学校女性研究センターのグループです。今年制定される「社会保険法」に男性の育児有給休暇を明文化し、男性がきちんと子育てに参加できるよう法律で保障すべきと主張し、各界に働きかけています。これは世代の再生産をめぐって社会の性差別が強化されていく流れに歯止めをかけ、長期的な視野に立ち男女平等社会の構築をめざす上で、非常に重要な一歩だと感じます。